街かど

街かどでは、みなさんの作品（写真、短歌、俳句、随筆）やさまざまな意見を募集しています。また、町のでき事をお知らせください。
原則として必ず取りあげます。
黒埼町役場　企画調整課
☎　七ー三一〇一

投稿

藤の花に母を思う

匿名希望(58才)

さざん花の木にからみついて、屋根までのびている藤のつる。冬は枯木のように屋根に枝を横たえて、弥生の風が通りぬけるころ、赤紫のつぼみをほころばせて、私の心をなごませてくれる。

私の友人が、藤の花は不吉な花だと言っていたが、私はこの薄紫の色がなんとなく好きだ。最近では、着る物も無意識に紫色を選んでしまっている。

若いころは青、中年になり黄色、最近は紫である。好みの色も年をとるごとに変わるものだなあと思う。

ふと、自分の人生をふり返ってみれば、若いころから四十五、六のころまではさんざん苦労のしどおしで、ゆったりとした気持ちなど持つ暇も余裕もなかった。ただ、気ぜわしくばたばたと働きづくめだった。これも一つの人生なのだとなかばあきらめてきた。

考えれば、母の人生もこうだったようだ。昭和四十三年に父が逝き、その後ようやく母は人並の日々を過ごせるようになった。父は、存命中、内づらが悪く暇さえあれば母をどなりちらしていた。母は毎日、そんな父の顔色をうかがっておどおどしながら生きていた。

父の死後、小平方のHさんから「お宅のおやじが笑うと、町中に聞こえるようだったなあ。」と言われたことがあったが、私はついぞ父のそんな大きな笑い声は聞いたことはなかった。おそらく、母もそうだったろう。

その母も逝きもう八年。去年七回忌(き)の法事をすませた。人生は人それぞれというが、果して私の人生はどうなのだろうか。

学舎を後に

三月十五日(月)。
黒埼中学校、卒業式。
男子百五十五人、女子百六十三人が義務教育を終えたのです。

村上俊介校長先生は、「陽に陰にみんなを助けてくれた両親や先生、また社会に感謝してください。そして、これからは自分の隣りの人のために役だつ人間に成長してください」という言葉を贈られました。

彼ら、三百十八名の若人、その前途に幸多きことを願いたいと思います。

短歌

いち早く春めく土手の南側蕗(ふき)の薹(とう)
はもここだ萌えつつ　平松清治郎

松苗を植え育つると竹肥(こえ)と梅剪定(せんてい)
とに心血注ぐ　柏　直樹地

兄が逝きその弟も歌始め三年目に
して世を去りにけり　酒井　庄平

新幹線の防音壁に吹きつくる風の
響きて海鳴りの如し　乙川　竹

短歌会

長き冬連れ去る如く残雪の庭面に
今朝は小雨の煙る　泉井　ヨ子

山茶花の花びら池に浮びおり台風
去りし朝の静けさ　阿部　浄子

川土手の風まだ肌に寒けれど草萌
えそめし土の香伝う　小出美喜子

雪椿赤き蕾(つぼみ)のふくらみぬ愛されし
人今は亡き庭に　金内　セツ

俳句

春の香に心なじむや今朝の雨
淡雪や恩師たづねる竹の里　滝沢　チイ

絞られしままに雑巾凍りつく
冬囲い暗き客間に舞人形

春風に晴着ほしいと枯木かな
針供養かの遠きわが乙女の日　佐藤　キン

編集室だより

▼今号から紙質を変えてみました。今までよりも活字や写真が鮮明になったかと思いますが、読者のみなさんの反応が気になります。

▼この三月で、本町から転出される人や学校を卒業して他県へ行かれる人も多いと思います。黒埼町は住みやすい町だったでしょうか。他で暮らして初めてわかることなのかもしれませんが。

▼郷土史家の宮田さんの努力と熱意には頭が下がります。もし、みなさんの家に古い日用品などがありましたら、ぜひ協力してくださるようお願いします。